

学校と家庭・地域の三者が共に進める コミュニティ・スクールの実践的研究（Ⅰ） —「立ち上げ期」における取組の実際—

Practicing research of both community schools
that three people (home and region) advance with school (Ⅰ)
— The measure of a “starting term” is actual. —

森 保 之

Yasuyuki MORI

福岡教育大学 教職実践講座

（平成23年9月30日受理）

要 約

本研究の目的は，コミュニティ・スクールを取り入れた学校づくりを推進するために，コミュニティ・スクールの在り方や考え方を明らかにすることである。学校運営協議会制度（いわゆるコミュニティ・スクール）が制度化されて7年目を迎え，全国で平成23年4月現在で789校（昨年比160校増）が，文科省のコミュニティ・スクール指定校になっている。地域的にも全国で31都府県において導入され，着実に広がりを見せている。また，文科省は今後5年間でコミュニティ・スクールを全公立学校の1割（約3000校）に拡大することを提案している。筆者は，平成17年から19年の3年間，九州初のコミュニティ・スクールの研究校（春日市立日の出小学校）の校長として，コミュニティ・スクールの実践を推進してきた。その後，多くのコミュニティ・スクール校の推進に関わってきている。そこで，「コミュニティ・スクールの基本的なとらえ方・考え方」を整理し，「どのようにしてコミュニティ・スクールを立ち上げたのか」立ち上げの経緯と留意点について提案し，これから立ち上げるコミュニティ・スクール校の推進に寄与したい。

キーワード

「学校運営協議会制度」「共育風土の醸成」「双方向の関係構築」「協働責任分担方式」「実働組織」

1 コミュニティ・スクールの必要性・重要性

教育改革の一つ「信頼される学校を目指した開かれた学校づくり」が様々な手法で全国どの地域の学校でも進められている。この開かれた学校づくりについては，国の動きに沿ってねらいを変え発展してきている。山本（春日市教育長）は，国と福岡県の動向を関連づけて開かれた学校づくりの歩みを次の3段階で整理している。

第1段階（昭和63年頃～）開かれた教育活動の
推進を主とした段階
◎地域の教育資源を活かした教育活動の推進

第2段階（平成12年頃～）開かれた学校経営
・運営の推進を主とした段階
◎地域住民の意向を反映した学校経営・運営
推進

第3段階（平成17年頃～）開かれた学校づくり
を地域基盤形成へつなぐ段階
◎地域ぐるみで学校を支援する仕組みの構築

このような流れの中で，平成16年に学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）の法制化，平成18年に改正教育基本法の制定等によって開か

れた学校づくりは社会全体で子どもを育てる地域基盤形成へと発展してきている。

さらに、国は、平成22年に「新しい公共」型学校の創造の推進を、続けて平成23年には「地域とともにある学校づくりの推進」を打ち出し、社会全体で教育の向上に取り組む施策を強化した。ここで、この2つの事業について詳述する。

①「新しい公共」型学校の創造の推進

文部科学省は、平成22年度の事業として『『新しい公共』型学校創造事業』と「学校運営支援等の推進事業」を立ち上げた。「新しい公共」型学校創造事業では、「地域住民の学校運営への参画の促進」「地域力を活かした学校支援」「学校力を活かした地域づくり」の観点から、活動を行い、学校と地域の共助体制によるコミュニティ・ソリューションの核となる「地域コミュニティ学校」のモデルを構築するとして、「新しい公共」型学校に共通して求められる要素を明らかにすることを目指すこととしている。具体的には、新たに「地域コミュニティ学校」を指定し、運営委員会を設置し、「地域住民も学校に参画する仕組みをつくる」とともに、校区内の学校長と連携を図りながら、地域の参画による子どもの活動支援と、学校資源を活用した住民の学習活動とその成果の活用を推進し、将来的な組織のNPO法人化や基金創設などの可能性も含めて学校と地域の共助体制の在り方について検討を行う」としている。

学校運営支援等の推進事業では、「保護者・地域住民と学校の信頼関係を深めるとともに、教員が子どもと向き合う時間が確保できるよう学校運営の充実・改善の取組を一層推進する他、高等学校教育改革の検証などによる初等中等教育改革の推進により、学校教育環境の改善と教育の質の向上を図る」ことを目的として、「コミュニティ・スクールの推進への取組」「学校評価に関する情報提供の充実・改善等に向けた取組」「学校運営に資する取組の推進」「初等中等教育改革の推進」の4分野において実践研究を行うとしている。

②地域とともにある学校づくりの推進方策

文科省では、平成22年10月に「学校運営の改善の在り方等に関する調査協力者会議」を設置し、社会の意識変化も踏まえた今日的な「学校と地域の関係」について議論を重ねてきた。そして、本年7月に「子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ～地域とともにある学校づくりの推進方策～」と題する提言をまとめた。その概要は次の通りである。

○学校と地域の連携は教育施策の中心柱として推進されてきたが、東日本大震災の被災地において多くの学校が避難所としての役割を担っていることは、地域における学校の役割を改めて強く認識させた。

○今後、全ての学校が、小・中学校の連携・接続に留意しながら、地域の人々と目線（子ども像）を共有し、地域の人々と一体となって子どもたちを育ていく「地域とともにある学校」をめざすべきである。

○「地域とともにある学校」を実現していくためには、学校と地域の人々の間での目標の共有や地域の人々の学校運営への参画が必要となる。関係者が当事者意識をもって「熟議」を重ね、「協働」して活動することや、それをうまく進めることができる校長の「マネジメント」と共に、教育委員会と教育長の明確なビジョンと行動が求められる。

○子どもを中心に据えた学校と地域の連携は、子どもの育ちにとどまらず、大人たちの学びの拠点を創造し、地域の絆を深め、地域づくりの担い手を育てることにつながる。

○今後、学校は、学校の課題にとどまらない地域の課題を解決するための「協働の場」となることで、「地域づくりの核」となることができる。

○地域とともにある学校づくりの推進のために、各地域・学校の自発性と独自性を基本とした教育委員会・教育長の主導的役割に期待するとともに、国には各地域・学校での取組を後押しする運用上、制度上、財政上のあらゆる角度からの支援を求める。

○国に対し、次の五つの推進目標を提案する。

①今後五年間でコミュニティ・スクールを全公立小・中学校の一割に拡大

②実効性ある学校関係者評価の実施

③複数の小・中学校間の連携・接続に留意した運営体制の拡大

④学校の組織としてのマネジメント力の強化

⑤被災地の学校の再生と震災復興の推進力となるような総合的な支援

○学校のガバナンスに関する課題など、地域とともにある学校づくりを促進していく上でさらに検討が必要な中長期的課題については、国に対し、十分な検討を要請する。

（下線は筆者による）

文部科学省は、この提言を踏まえ、各地域・学校における地域とともにある学校づくりが促進されるよう、具体的な支援策を検討するとともに、コミュニティ・スクール等の普及啓発に力を入れていくと述べている。このように、コミュニティ・スクールの目的が単に子どもたちの豊かな学びの場だけに止まらず、地域社会を活性化させるスクールコミュニティを形成する新しい公共の場としての学校、つまり、社会全体の教育力の向上につながるコミュニティ・スクールが積極的に進められることを期待されているのである。

2 コミュニティ・スクールの基本的な考え方・とらえ方

(1) 「共育文化」の醸成をめざすコミュニティ・スクール

コミュニティ・スクールは、平成16年6月の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により導入されたものである。合議制の機関である学校運営協議会の委員として教育委員会から任命された保護者や地域住民が、一定の権限と責任を持って学校運営の基本方針を承認したり、教育活動について意見を述べたりして、よりよい教育の実現を目指す、地域とともにある学校づくりの仕組みである。

では、具体的にその仕組みをどのように考えたらよいのか。春日市では、この改正を受けて平成17年4月に「学校運営協議会規則」を施行した。本市におけるコミュニティ・スクールのねらいについては、その規則の中に次のように示されている。

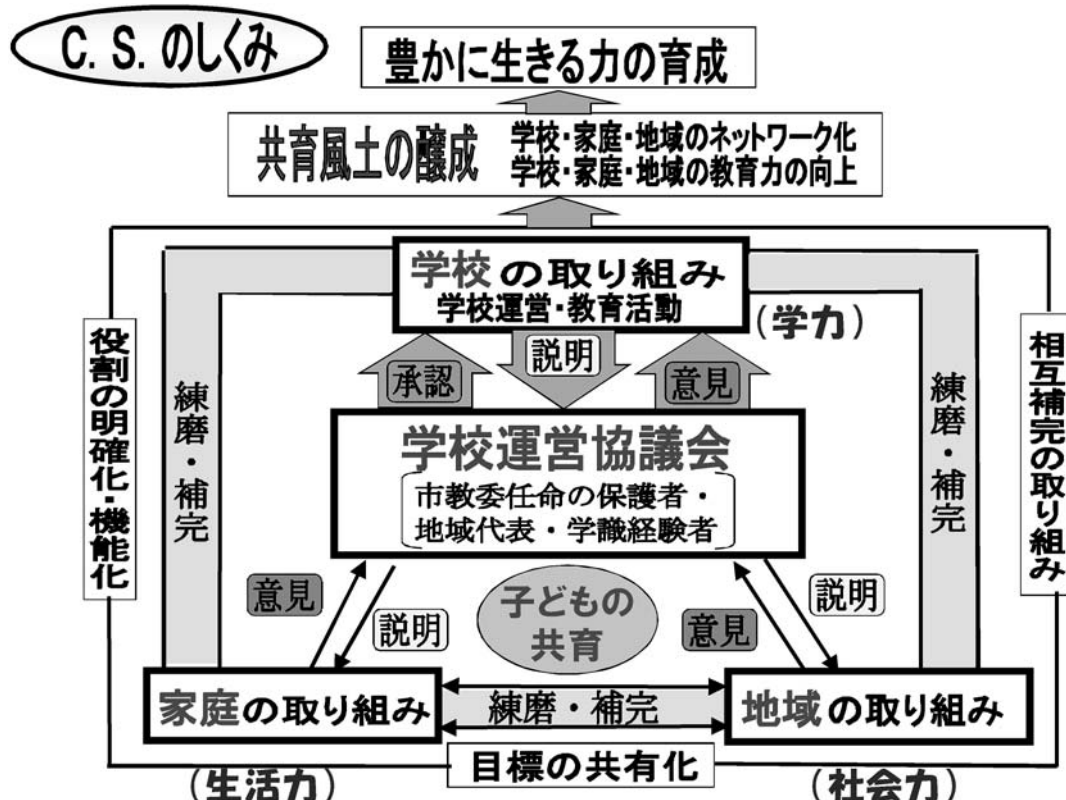
【春日市学校運営協議会規則】（一部抜粋） （協議会設置の目的）

第2条 協議会は、学校が掲げる教育目標の実現に向け、一定の権限と責任を持って学校運営に参画することにより、次の各号に掲げる事項の達成を目指すものとする。

- (1) 地域の住民及び保護者等(以下地域住民等という)が、学校との連携の下、目標を共有化し、責任を分かち合い、協働して児童及び生徒の育ちに関わる風土が醸成されること。
- (2) 家庭及び地域の教育力が向上することにより、児童及び生徒の豊かに生きる力が育成されること。
- (3) 地域住民等と学校との信頼関係が深まることにより、地域に開かれ、地域が支え、信頼される学校となること。（平成20年4月1日改正）

（下線は筆者による）

資料1（コミュニティ・スクールの全体構想図）



前頁の規則から春日市のコミュニティ・スクールの重要なポイントをあげると、「三者で目標を共有化し、責任を分かち合い、協働して児童及び生徒の育ちに関わる風土が醸成されること」「三者の教育力の向上により、児童及び生徒の豊かに生きる力が育成されること」「地域に開かれ、地域が支え、信頼される学校に資すること」の3つである。そこで、この3つを基本に踏まえ、次のようなコミュニティ・スクールの構想を立てて展開している。

まず、コミュニティ・スクールの構想の中核としている考えを「学校・家庭・地域による共育(共に育てる)」にしているということである。これは、学校・家庭・地域三者が各役割と責任を持って子どもの教育にあたっていくということである。

そこで、春日市が描いているコミュニティ・スクールの目指す姿を要約すると、資料1に示しているように、「共育や子育ての目標を学校・家庭・地域が共有すること」を基盤として、「学校と家庭と地域の役割を明確にすると共に各役割を果たしていくこと」そして「相互が取組を補完し合い、錬磨していくこと」これらの3つを不可欠とする取組を重視することを通して、「校区・地域に共育風土のある環境」を醸成し、子どもたちに「豊かに生きる力」を育てていくことである。

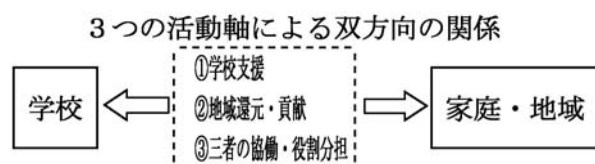
つまり、コミュニティ・スクールとは、「共育(共に育てる)」という理念のもとに子どもたちを

育成していく、このような共育文化を地域(校区)に醸成していることである。

(2) 双方向の関係構築をめざすコミュニティ・スクール

上述したようにコミュニティ・スクールがめざしている姿は、子どもが育つ地域基盤形成(共育「共に育てる」文化の醸成)である。そこで、我々が大切にしているのが、三者の『双方向の関係』構築である。

地域の学校支援の活動だけでは、共育は成り立たない。それと併せて、学校からの地域貢献・還元、三者の協働と役割分担の活動があって双方向となる。このように、コミュニティ・スクールにおいては、次の図のように3つの活動軸を構築しなければならない。

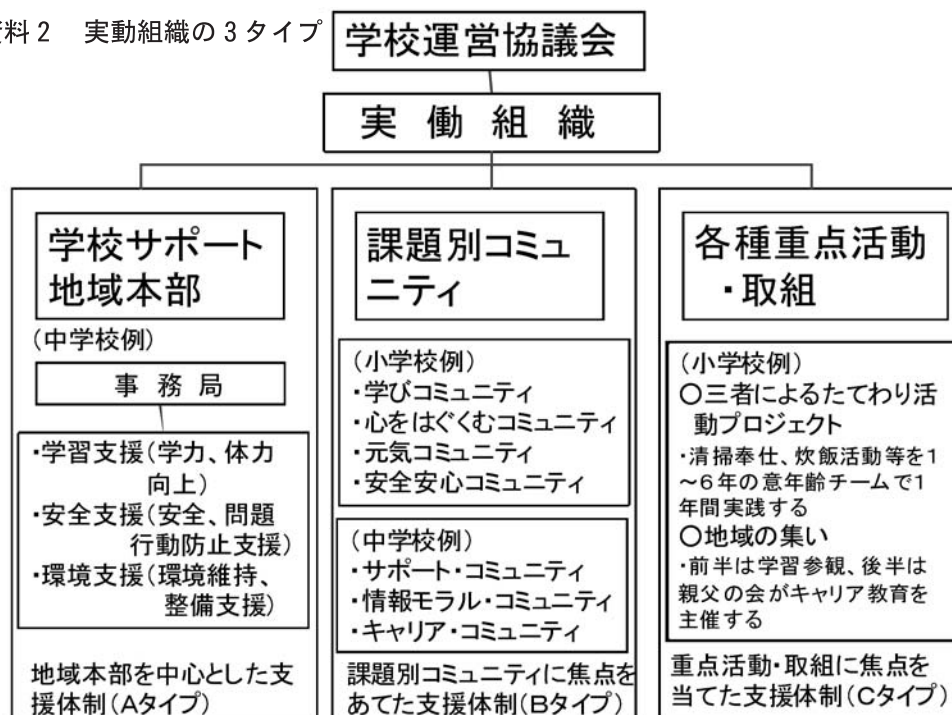


(3) 協働責任分担方式による学校運営協議会

上記のようなコミュニティ・スクールの考え方に立つと、重要な事柄としておさえておかなければならないことが、学校運営協議会の学校における組織上の位置づけである。学校運営協議会の位置づけには、次の2つが考えられる。

1つは、学校運営に関わる全ての議案を学校運

資料2 実動組織の3タイプ



営協議会で承認・決定していく方式でこれを「理事会方式」と呼んでいる。この方式は学校運営協議会が校長の上に位置づけ、全ての権限を有している。もう一つは、校長のリーダーシップのもと、学校職員と学校運営協議会とで協議し合いながら学校運営方針を決め、共に責任と役割を分担している方式でこれを「協働責任分担方式」と呼んでいる。この方式による学校運営協議会の性格は、校長のよき理解者、学校の支援団・応援団として、また、協働者として承認・協議・参画・評価という役割を担っている。春日市ではこの協働責任分担方式をとっている。

協働責任分担方式のコミュニティ・スクールにおいては、その理念からすると、学校依存偏重からの大きな脱皮であり、学校のみに対する一方的要求・批判はなじまないものとなる。

なお、学校運営協議会委員は、春日市教育委員会が学校長と協議して任命することになっており、本校（日の出小）では、学識経験者1名、地域代表6名、保護者代表3名、学校代表3名、行政代表2名の15名で構成した。特徴的なのが、行政代表が委員として位置付いているということである。

そのことで、学校の設置者としての意見を述べると共に、協議会委員の意見を基にした行政の学校支援が可能となっている。

（4）実働組織を位置づけた学校運営協議会

学校運営協議会では、協議・承認がなされるが、このことが三者（学校・家庭・地域）による実践として機能していかなければその効果は上がらない。協議・承認に終始する学校運営協議会にとどまるからである。そのため、学校運営協議会の推進部となる実働組織が必要となる。このため各学校は学校状況・地域実態に合わせた組織化を図っている。その在り方は様々である。春日市ではその実働組織を資料2に示しているような3つのタイプに整理している。

1つは、地域本部を中心とした支援体制（Aタイプ）をとる学校である。ここでは、学校を支援する実働組織「学校サポート地域本部」を立ち上げて、学校の教育活動等を支援するため、地域住民による学校支援ボランティア等がコーディネートする役割を担っている。2つは、学校運営協議会で承認された内容を課題ごとに具体化し、実践

表1 日の出小学校学校運営協議会 第2次アンケート集計結果(資料)

平成17年12月15日

上位2項目
全集計が、0.5以上の項目

一日の出小学校の家庭・地域・学校でめざす子ども像全集計;平均

I【子どもの学力に関する質問】～学力向上のために

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

1 しっかりと自分の考えを表現することができる。

2.49

3.26

0.76

2.62

3.11

0.49

2.26

3.4

1.14

2.5

3.3

0.76

2 自分の学習課題(目標)を達成し、最後までやり抜くことができる。

2.37

3.26

0.77

2.32

3.06

0.74

2.09

3.32

1.23

2.35

3.3

0.88

3 友達と協力して学習したり問題を解決したりできる。

2.69

3.13

0.44

2.39

3.1

0.71

2.3

3.28

0.98

2.64

3.3

0.49

4 自分で学習や持ち物の準備をしている。

3.18

3

1

3.12

3.33

0.21

5 毎日(学習や復習を含めて)家庭学習をしている。

2.66

3

1

2.66

3.21

0.55

6 (学)体験を重視し、地域の人材を活用した学習を展開している。

3.23

3

1

3

3.07

-0.14

II【子どもの健康や生活に関する質問】～健康・体力向上のために

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

1 朝、しっかりと自分で起床している。

2.42

3

2.42

3.11

0.69

2 進んで外遊びをしたり運動をしたりしている。

3.23

3

3.23

3.28

0.19

3 毎日、朝食を食べている。

3.75

3

3.75

3.58

-0.17

4 好き嫌いなく食べることができる。

2.91

3

2.86

3.25

0.39

III【子どもの基本的な生活習慣に関する質問】～生活力の向上のために

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

1 元気にあいさつや返事ができる。

2.73

3

2.7

3.39

0.69

2 (家・地)大人の人はあいさつをしている。

2.92

3

2.81

3.35

0.54

3 時間を守って生活している。

2.66

3

2.63

3.23

0.6

4 相手にあわせた言葉遣いができる。

2.53

3

2.51

3.31

0.8

5 進んで家庭での仕事やお手伝いをするすることができる。

2.4

3

2.4

3.14

0.74

6 進んで掃除や整理整頓をしている。

1.92

3

1.97

3.2

1.23

IV【子どもの社会規範や道徳的行動に関する質問】～モラル形成のために

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

1 よいことと悪いことの判断ができ、正しい行動をとることができる。

2.88

3

2.81

3.47

0.66

2 進んで学校や社会のルール・モラルを守って生活することができる。

3.02

3

2.86

3.41

0.55

3 周りの人に対して思いやりのある行動ができる。

2.85

3

2.84

3.36

0.52

4 植物や動物を大切にしている。

2.96

3

2.87

3.25

0.38

5 (地)地域住民のマナーはよい。(ごみ、ペットの飼育のマナーなど)

2.34

3

2.3

3.29

0.99

V【子どもの豊かな生活に関する質問】～さらなる力の向上のために

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

1 年間の異なる集団で活動することができる。

3.03

3

2.96

3.18

0.22

2 進んでボランティア活動に参加している。

1.93

2

2.05

2.9

0.85

3 進んで地域の行事に参加している。(廃品回収、夏祭り、もちつき大会)

2.79

2

2.83

3

0.17

4 地域の人と親しく話している。

2.57

2

2.62

2.98

0.36

5 (家)家賃の払いは、よくできている。

3.15

3

3.15

3.44

0.29

6 (地)地域では、子育ての悩みなどを相談する場がある。

2.21

2

2.27

2.98

0.71

VI【安全な生活環境に関する質問】～安全対策力の向上のために

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

現状A

重要度B

日-A

1 通学路を守り、交通安全に気を付けている。

3.31

3.48

0.17

3.11

3.34

0.23

2.57

3.63

1.06

3.24

3.47

0.23

2 自転車の乗り方やマナーを身に付けている。

2.81

3.39

0.58

2.37

3.38

1.01

2.15

3.48

1.33

2.71

3.4

0.69

3 不審者や危険なことへの対応の仕方を身に付けている。

2.6

3.64

1.04

2.65

3.54

0.89

2.24

3.79

1.55

2.6

3.63

1.03

4 (学)学校施設は安全に保たれている。

2.76

3.52

0.76

2.83

3.43

0.6

2.88

3.67

0.79

2.78

3.52

0.74

全集計

重要度B

B-A

2.5

3.26

0.76

2.35

3.23

0.88

2.64

3.13

0.49

3.12

3.33

0.21

2.66

3.21

0.55

3.21

3.07

-0.14

全集計

重要度B

B-A

2.42

3.11

0.69

3.09

3.28

0.19

3.75

3.58

-0.17

2.86

3.25

0.39

全集計

重要度B

B-A

2.81

3.47

0.66

2.86

3.41

0.55

2.84

3.36

0.52

2.87

3.25

0.38

2.3

3.29

0.99

全集計

重要度B

B-A

2.96

3.18

0.22

2.05

2.9

0.85

2.83

3

0.17

2.62

2.98

0.36

3.15

3.44

0.29

2.27

2.98

0.71

全集計

重要度B

B-A

3.31

3.48

0.17

2.81

3.39

0.58

2.6

3.64

1.04

2.76

3.52

0.76

していく実働組織で「課題別コミュニティ」と称し、「課題別コミュニティ」に焦点を当てた支援体制（Bタイプ）をとる学校である。3つは、学校の重点活動・取組に焦点を当てた支援体制（Cタイプ）をとっている学校である。どのタイプの支援体制・組織がよいかは学校や地域の実情で大きく変わっていく。

3 学校運営協議会の歩みとその実際

平成17年度4月に文部科学省、春日市教育委員会の委嘱の指定を受け、春日市立春日北小学校、春日北中学校といっしょに春日市立日の出小学校は、コミュニティ・スクールの実践校としてスタートさせた。その3年間、段階を踏みながら、目指す目標の共有化や学校運営協議会や実働組織の構成等の組織体制の確立や三者の双方による活動の推進等に努めてきた。そこで、春日市立日の出小学校が「立ち上げ期（平成17年～19年）」の3年間において、どのようにしてコミュニティ・スクールを立ち上げていったのか、学校運営協議会設置時からの経緯について5つのステップに分けて述べることにする。

(1) ステップ1：地域ニーズに応える学校の方向性の明確化（H17年6月～12月）

コミュニティ・スクールとして、学校・家庭・地域が一体となって学校運営を行う際に、とても重要なことは、目標を三者でどのように共有するかという「目標の共有化」である。そこで、三者での共通の目標を設定するため、2段階のアンケート調査を実施した。第1次調査では、保護者や地域住民の本校教育に対する課題意識や学校に体する意向を明らかにすることを目的として、日の出小学校の子どもたちの「よいところ」「子どもたちに望むこと」「その他気づいたこと」の3項目で調査を行った。その結果を整理し、学校運営協議会で検討を重ね、学校には「心の教育」と「学力向上」を推進すること、家庭には「基本的生活習慣を含めたしつけの指導」、地域には「地域住民同士のネットワークの強化」が求められ、日の出小学校の子どもたちには、「学力の向上」「健康体力の向上」「生活力の向上」「モラルの向上」「関わる力の向上」「安全対応力の向上」が求められていることが分かった。

そこで、6つの力を育てるための具体的な活動内容や方法を明らかにすることを目的とした第2次調査を行った。この調査では、身につけさせたい6つの力ごとに、期待される具体的な行動様式を示し、その「現状度」と「重要度」を問うとともに、

「具体的指導のアイデア」を問う3項目の調査を行った。集計結果は、表1のとおりである。表1に示しているように、重要度Bから現状度Aを引き、その差の大小で、どの項目が早急に解決しなければならない課題かを把握することになっている。つまり、重要度から現状度を引いた数値差が大きいほど、解決が急がれる教育課題であるにとらえたわけである。この集計表をもとに、保護者や地域住民に対する説明会を行い、それぞれの立場からの意見を出していただき、その意見を基に学校運営協議会で検討することを繰り返し行い、各視点の具体的な目標を絞り込み、重点目標として設定していった。また、具体的な指導のアイデアについては、今後の活動づくりの資料として、活用することとした。

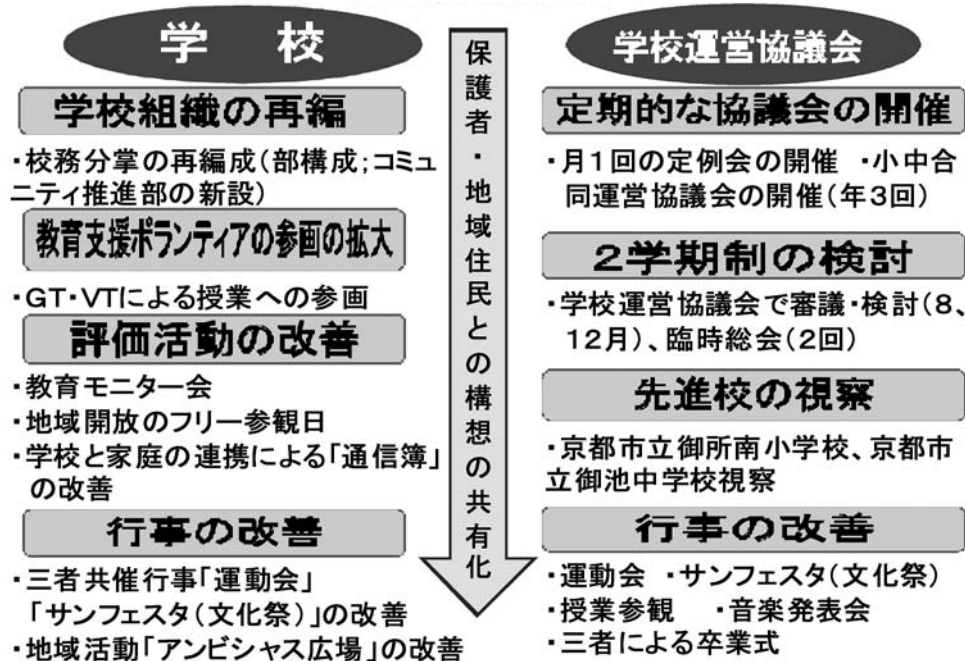
このように、学校・家庭・地域の三者で子どもたちを見つめ、目指す子ども像を共に作り上げることで、三者での目標の共有化を図っていったのである。

(2) ステップ2：コミュニティ・スクールの在り方の模索（H17年6月～12月）

学校・家庭・地域の三者で第1次、第2次アンケート調査をしながら、目標の共有化を図ることと並行して、資料3に示しているように、学校並びに学校運営協議会の様々な取組を通して、コミュニティ・スクールの在り方を模索していった。「どのような取組が考えられるか」「どのように連携していくか」「三者がどのような役割で進めるか」などについて熟議を通しながら、少しずつ創り上げていった。

まず、学校の取組としては、学校の取組が、学校運営協議会と連動するように学校の校務分掌組織の再編を行った。具体的には、課題ごとの部構成にし、運営協議会と連携するコミュニティ推進部を新設した。次に、これまでの教育支援ボランティアの参画による教育活動の充実を図るために、人材バンクシステムを構築し、GT・VTによる授業づくりの拡充を図った。そして、評価活動の改善では、公募制による教育モニター会の実施やフリー参観（1日参観）を実施し、学校の実情をしっかりと把握して評価してもらうシステムを構築した。また、学校と家庭が連動を深めながら評価する通信簿の改善も行った。さらに、行事の改善については、三者共催の行事「ふれあい合同運動会」「ふれあいサンフェスタ（文化祭）」や生涯学習の一環でもある地域主催の取組「サンライズアンビシャス広場」の活動内容の見直しをし、三

資料3 学校と学校運営協議会の取組



者による組織的な活動ができるようにシステム改善を行った。学校運営協議会では、まず、定期的な会議として、毎月1回の定例の学校運営協議会の開催、小中合同の連携協議会(年3回)を行った。次に、先進校視察による研修を行い、学校運営協議会の取組のための情報の収集や学習会の充実させた。さらに、学校の各種行事への地域住民の参加を進めた。このようにして、コミュニティ・スクールの考え方やその取組を構想するとともに、このことを多くの保護者や地域住民に共有できるようにした。

(3) ステップ3：組織運営の機能化（実働組織の設置 H18年1月～3月）

学校・家庭・地域の三者が責任を持って学校運営に参画し、学校運営を推進していくには、前述したように、学校運営協議会を真に機能させていかなければならない。学校運営協議会の場で様々な学校運営に関わる内容が、提案され、協議、承認の活動が旺盛に展開されることが重要である。そのためには、学校運営協議会の委員が学校の教育活動の実態を正確に把握するために、学校は、学校経営・運営方針や予算・決算資料、校内研修の在り方等、様々な学校運営に関わる情報を的確に提供するとともに、その内容について具体的に分かりやすく説明することが大切であると考えている。さらに、学校運営協議会で協議した結果は、議事録や学校運営協議会通信、ホームページ等に

より、多くの保護者や地域住民、学校職員に発信していなければならない。

しかしながら、この学校運営協議会を設置しただけでは、私たちが目指すコミュニティ・スクールの目的は達成できない。私たちが目指すコミュニティ・スクールは、地域住民の意向を反映する取り組みを進めている以上、学校や学校運営協議会委員に全てを担わせるのではなく、学校・家庭・地域の三者がそれぞれどんな役割を担い、どんな活動をしていけばよいか、このことを明確にし、責任をもって各機能を発揮させることを大切にしたい。また、「三者が目指す目標を共有すること」「三者の取組が補完・錬磨されること」も重要である。このような考えに立ち、平成18年1月から学校運営協議会で協議された内容を具体化し、実践していくために、実働組織を立ち上げた。「2コミュニティ・スクールの考え方(3)実働組織を位置づけた学校運営協議会」の中で詳述しているように、春日市では実働組織として、3つのタイプに整理している。日の出小学校では、立ち上げにあたって前述したように2回のアンケート調査によって課題を明らかにし、めざす子ども像を確立していった流れから、その3つのうちのBタイプである「課題別コミュニティに焦点を当てた支援体制」をとることとした。

日の出小学校では、2回のアンケート調査から「学力の向上」「健康体力の向上」「生活力の向上」「社会的モラルの向上」「安全対応力の向上」等の

課題を解決するための企画実施を担う実働組織として「日の出小課題別コミュニティ」が設置した。具体的には、「学びコミュニティ」「心をはぐくむコミュニティ」「元気コミュニティ」「安全・安心コミュニティ」の4コミュニティをつくり、上記の5つの課題解決をめざすようにした。日の出小学校の課題別コミュニティの特色は、まず成員としては、各コミュニティとも学校代表、家庭代表、地域代表として2名ずつで構成されており、三者のアイデアがしっかり反映できるようにしている。また、学校運営協議会委員の方々にも各コミュニティの補助役としてメンバーと一員になってもらっている。そのことで課題別コミュニティで企画されたことが、そのまま学校運営協議会にも上がり、スムーズな運営ができるようにした。

(4) ステップ4：実働組織「課題別コミュニティ」の活動計画づくり（H18年2月～3月）

課題別コミュニティの活動を行うにあたって、まずやらなければならないことは、学校・家庭・地域が共通にめざす子どもの姿を持つことである。そこで、平成18年2月以降から各コミュニティのメンバーで部会を繰り返し行いながら、子どもの実態をしっかりとつかみ、学校・家庭・地域の願いをすりあわせ、めざす子どもの姿を決定していった。そして、めざす姿が決まったら、その姿に向かって何を行っていけばよいか、考えられる活動内容を三者で出し合っていた。いくつか出した活動案の中から、一度にたくさんの活動を行うことはできないので早急に改善しなければならないものから活動を行っていくようにした。また、活動内容を考えるときも新しい活動を進んでやるというよりもこれまで部分的に取り組んできているものやこれまでの活動を修正して、三者で共有しながらやっていくというスタンスに立って進めていった。活動内容が決定したら、学校・家庭・地域の三者で「いつ」「誰が」「何を」行っていくのかという具体的な活動計画を創り上げ、役割を分担しながら実践へと高めていくのである。

表2は、日の出小学校「学びコミュニティ」の活動計画である。このような一連の計画を一つ一つ立てていきながら、各課題別コミュニティごとの活動が始まるのである。さらに、活動が継続的に行われ、めざす子どもの姿に近づいているのか、改善していくことはないかを評価していくために、定期的に課題別コミュニティごとの部会を開き、学校・家庭・地域の取組状況を出し合いながら、活動の見直しと修正を行っていくのである。

(5) ステップ5：実働組織「課題別コミュニティ」の実践の概要（H18年4月～）

これまで述べてきたようなステップを踏まえてつくり上げられた課題別コミュニティの組織とその具体的な計画は、学校運営協議会に提案され、審議承認を得て、実践に移すことになる。この承認された課題別コミュニティの活動計画については、平成18年5月の地域や保護者対象の「コミュニティ・スクール説明会・PTA総会」の場で説明し、学校・家庭・地域の取組に対する役割や責任の共通理解を図っていくことが重要である。

日の出小学校課題別コミュニティの主な活動

- ・学びコミュニティ
「共学」「学びの習慣化」の推進、「頭のチャレンジ」の実践
- ・心を育むコミュニティ
「開かれた読書活動」「心のチャレンジ」の推進「生き生きサロンや子ども公民館活動」への参加「登校クリーン作戦」
- ・元気コミュニティ
「早寝、早起き、朝ご飯運動」「挨拶運動」の推進、「体のチャレンジ」の実践
- ・安全・安心コミュニティ
「三者による交通安全教室」「ついで隊、子ども110番の家」の取組「地域安全パトロール」の取組、「安全マップづくり」「情報メール」等

課題別コミュニティの活動を深化・発展させてくためには、常に、取組に対する振り返りを行ながら改善をしなければならない。そのために、各課題別コミュニティでは、学校、家庭・地域の代表者が常に連携を取り合って進められようとしておくことが大切である。また、各課題別コミュニティがそれぞれ単独で活動するのではなく連携を図って活動していけるようにするために、それぞれのコミュニティの取組を共通理解する場を設定している。課題別コミュニティの部会や全体会を定期的に行っていくことで、定期的な取組の振り返りができ、改善しながらよりよい組織へと高め、めざす子どもの姿に近づけていくことができるようになるのである。基本的には、学校運営協議会の会合の後に課題別コミュニティの部会を持ち、連携および会の運営の効率化を図っている。また、学校運営協議会や課題別コミュニティ活動の様子が広く地域住民に広がるように、活動の様子を伝えることを目的とした「コミュニティ通信」を発

学校と家庭・地域の三者が共に進める
コミュニティ・スクールの実践的研究（Ⅰ）
－「立ち上げ期」における取組の実例－

133

●学びコミュニティ活動計画

日の出小学校

めざす子ども像			《基礎基本を身につけ、みんなで学び合う子ども》			
重点目標及び (活動内容)			○分かる・できる楽しい授業作りをします。→《学び合い学習の推進「共学」の授業、STによる支援活動》 ○学びを創造していくための学び方を育てます。→《「学びの習慣化」活動「学問のすすめ運動」》 ○基礎基本の力をしっかり身につけさせます。→《長期休業を生かした学習「サマースクール」、知のチャレンジ大会》 ○学校と家庭と連携を図りながら評価機能を充実させます。→《「サンちゃんのふりかえり」、通信簿「かがやく子」、モニター会》			
月	時	期	学 校 の 役 割	参観・懇談	家 庭 の 役 割	地 域 の 役 割
4	上 中 下	つ	学び合い学習の推進 ・研究推進委員会による各期の学び方提案を受けて各担任が実践 ↓ サンライズティーチャー募集 (教頭・教務)	◎17日 ◎役員選出 ※毎月15日 「日の出の日」	学びの習慣化への取り組み ・「日の出っ子ノート」に目を通す ・家庭での学習環境づくり等 ↓ サンライズティーチャーへの積極的参加	※モニター会への積極的参加
5	上 中 下	る	↓ サンライズティーチャー各簿作成 (教頭・教務から職員に各簿配付) ↓ 19年度研究推進計画提案 (研究推進委員会)	◎9日 ◎説明会	「学問のすすめ」「教科ガイド」に目を通し、理解する ↓ サンライズティーチャー、共学の授業への積極的参加 (9日の懇談会で学年・学級委員が参加の呼びかけを行う)	
6	上 中 下		↓ 共学の授業・実践計画作成 ・各学年で実施時期の選択、実践内容を決定 (指導法工夫改善推進委員会) ↓ 赤ペン先生の募集 ・文書作成(教頭) ・懇談会(21日)で呼びかけ(各担任)	◎21日 ◎課コミ	赤ペン先生への積極的参加 (21日の懇談会で学年・学級委員が参加の呼びかけを行う)	
7	上 中 下	高	↓ 共学の授業1 5日参観(○年) ↓ サマースクールの実施 (23、25、26、27)	◎5日 ◎整理会	共学の授業への積極的参加 ↓ 「サンちゃんのふりかえり」をもとに親子での話し合い ↓ サマースクールへの支援 (赤ペン先生)	
8		る	↓ 「日の出っ子ノート」の活用状況、学びの習慣化について保護者と話し合い (5日の懇談) ↓ 「知のチャレンジ」課題提示 (各学年)			
9	上 中 下		↓ 「サンちゃんのふりかえり」実施 (各担任) ↓ 「知のチャレンジ①」(31日各学年) ↓ 賞状作成・渡し (各学年)	◎12日 ◎テーマ	「知のチャレンジ」の結果を家庭で認める ↓ 共学の授業への積極的参加	
10	上 中 下		通信簿「かがやく子」作成・配付 (各担任)		通信簿「かがやく子」をもとに親子での話し合い	
11	上 中 下	創	共学の授業3 (○年) ↓ 共学の授業4 (○年)		共学の授業への積極的参加	
12	上 中 下	出	↓ 共学の授業5 (○年) ↓ 「日の出っ子ノート」の活用状況、学びの習慣化について保護者と話し合い (12日の懇談) ↓ 「サンちゃんのふりかえり」実施 (各担任) ↓ 「知のチャレンジ」課題提示 (各学年)	◎12日 ◎整理会	学びの習慣化について見直す 共学の授業への積極的参加 「サンちゃんのふりかえり」をもとに親子での話し合い 「知のチャレンジ」の課題に家庭で取り組ませる	
1	上 中 下	す	↓ 「知のチャレンジ②」(10日各学年) ↓ 共学の授業6 (○年)		「知のチャレンジ」の結果を家庭で認める 共学の授業への積極的参加	
2	上 中 下	つ	賞状作成・渡し (各学年)	◎21日 ◎報告会		
3	上 中	な	通信簿「かがやく子」作成・配付 (各担任)		通信簿「かがやく子」をもとに親子での話し合い	

表2 (平成18年度 日の出小学校「学びコミュニティ」の活動計画)

行している。コミュニティ通信では毎月開催する学校運営協議会の内容や協議内容決定事項・承認事項を分かりやすくまとめたり課題別コミュニティの実際の活動の様子を載せたりして、学校職員や全家庭・地域に配布し、「今学校や地域でどんな取組が行われているのか」「次にどんなことを行っていくのか」「保護者地域のみなさんに対してへのお願い」等を積極的に呼びかけている。この他にも学級や学年懇会の時の懇談のテーマとして、課題別コミュニティの取組を取り上げたり、「コミュニティノートを使って、毎日、学校と家庭とが課題別コミュニティの取組を評価し合ったりしながら実践を進めている。

さらに、学校の敷地内にコミュニティ掲示板や地域情報掲示板を設置し、広く地域の活動を目的に情報発信できるようにしている。このことで大人にも子どもたちにもコミュニティの活動や地域の活動の状況を知るよい機会になっている。このことを契機となって子どもたちの地域活動へ進出・参画が促進されるようになったのである。

以上のように、コミュニティ・スクールとし平成17年4月からスタートし、学校運営協議を中核として、学校・家庭・地域が目標を共有し、めざす子ども像の実現に向けて、課題別コミュニティを中心に、学校・家庭・地域の三者が役割と責任を明確にし活動を進めてきたのである。

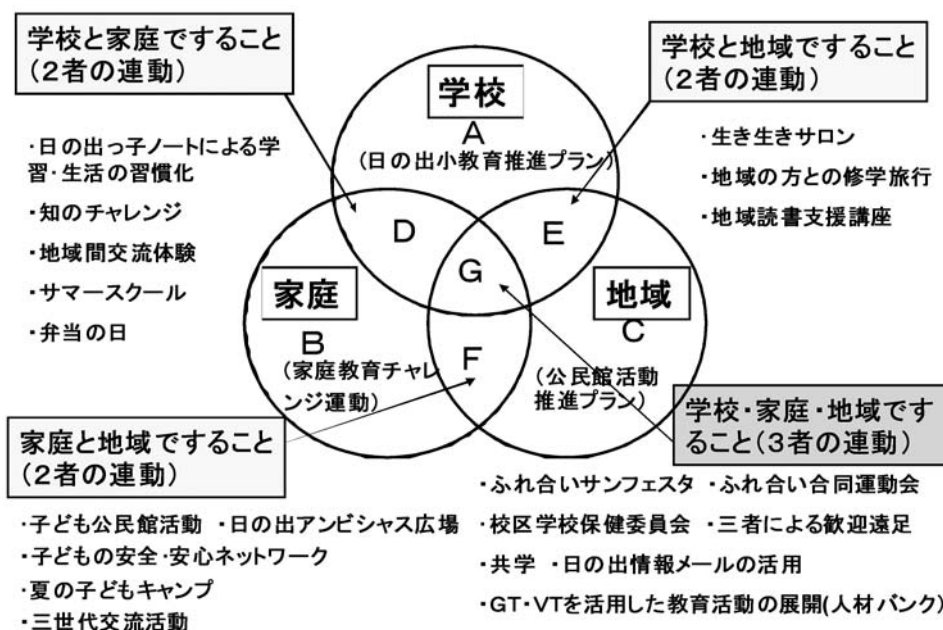
4 コミュニティ・スクールでの三者による連携活動の在り方（連携に着目したカリキュラム）

学校・家庭・地域の三者による連携活動については、資料4を参照してほしい。3つの円はそれぞれ学校と家庭と地域の活動を表している。A、B、Cは学校や家庭や地域による独自の活動である。Dは学校と家庭が連携した活動、Eは家庭と地域が連携した活動、Fは学校と地域が連携した活動、Gが学校・家庭・地域三者が連携した活動を表している。この中で学校のカリキュラムに関わるものは、A、D、E、Gである。その中のAは、学校と地域・家庭連携に関係なくこれまでの学校が独自に進めてきた内容の改善充実を図っていく領域である。学校の取組と関わるのは、A、D、E、Gであるが、コミュニティ・スクールでは、D、E、Gの学校と家庭・地域との連携に着目したカリキュラムの工夫が求められる。

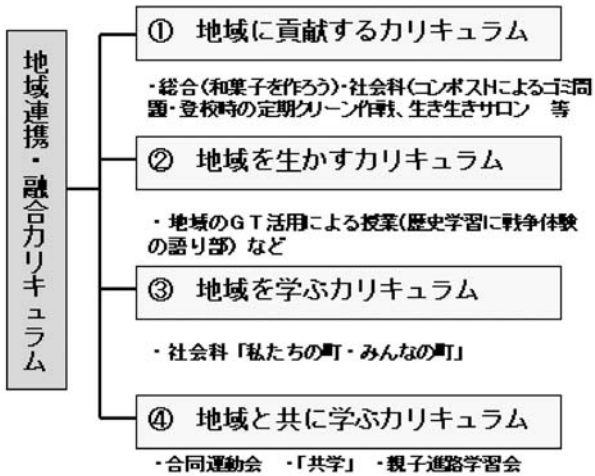
この家庭・地域と連携したカリキュラムについて、山本氏は資料5のように、①地域に貢献するカリキュラム ②地域を生かすカリキュラム ③地域を学ぶカリキュラム ④地域と共に学ぶカリキュラムの4つに整理している。

①地域に貢献するカリキュラムとは、学校での学習を子供たちが地域への還元、寄与へとつなぐカリキュラムである。事例としては、教育課程内の教育活動では、総合的な学習の時間、社会科、生活科、特別活動（学校行事、児童会、生徒会）等での発展的な学習場面等でよく見られる。もともと地域の福祉活動として行われていた『生き生

資料4 三者による双方向の連携活動 C S日の出小学校



資料5 地域連携・融合カリキュラムの開発



きサロン』に子供たちがゲストとして活動をするのである。低学年の子供たちは高齢者と一緒にふれあう活動をしたり、高学年はキャリア教育の一環で高齢者を支援するために料理や高齢者へのお世話活動をしたりするのである。月に1回の高齢者と子供たちのふれあい活動となり、地域の方々も毎回の生き生きサロンを楽しみにしている。教育課程外の教育活動の実践事例では、登校時の定期的クリーン作戦や地区の夏祭り等地域行事に子供たちが参画する活動がある。子供たちの活躍によって地域の活動がさらに充実してきている

②地域を生かすカリキュラムは、地域の教育資源（人、もの、こと）を生かすカリキュラムであり、開かれた学校の進捗の中でどの学校においても取り入れられ、広がりを見せている。事例をあげると、小学校での社会科学習で、地域の人をゲストティーチャーとして社会科の歴史学習に戦争体験を語っていただき、それをもとに子供たちが討議を重ねながら学習を深めていく場合がある。また、ボランティアティーチャーとして、算数科等の習熟度学習での赤ペン先生や、生活科の学習での引率のお世話等がある。

③地域を学ぶカリキュラムとは、地域の文化や歴史等を学習内容として取り上げ子供たちに学習させていくものである。ここでは、小学校での総合的な学習の時間、小学校中学年の地域そのものを学ぶことが基本となる社会科の学習や小学校6学年社会科「私たちの願いを政治へ」で見られる。具体的には中学年単元「わたしたちのまち」では、学校の周りや市の様子を調べる中で町の特色や地理的な見方・考え方を学んでいく場面がある。その過程では子供たちは町の人や施設の人にインタビューし、地域の文化や歴史を調べていくのであ

る。

④地域と学ぶカリキュラムとは、地域の人と活動したり、学習したりする学習で「共学」と言うカリキュラムである。事例としては、子供と地域住民・保護者が楽しむふれあい運動会や合同文化祭がある。運動会の計画実施では、それぞれの役割を分担して進めている。また、地域の人と子供たちが共に学習する事例としては、小学校1年学級活動「私の誕生日」がある。子供たちが誕生したときの親の気持ちを生で聞いたり、親が子どもの、子どもが親の気持ちを想像したりすることで、子どもは自分が大切に思われていることを実感し、親は子どもの成長を実感できるようにする授業である。この授業を受けた母親からは次のようなコメントが寄せられた。

「誕生日はなぜお祝いするのかというめあてに一瞬ドキッとしました。これまで子どもの誕生日をプレゼントとケーキという恒例行事として過ごしてきました。親から生まれてきたことや無事にいることのすばらしさを言葉で伝える日にしたいと思いました。私にとって素敵な「共学」の授業でした。」

もう1事例あげてみたい。5年社会科単元「私たちの生活と環境～水俣は今～」という環境問題を地域・保護者と子供たちが一緒に学び合い、深めていく実践である。「水俣はどうやって『環境都市』としてよみがえってきたのだろうか」という学習課題を解決するために、「みなまた」というラベルで売られているお茶を教材化し、「水俣で『みなまた』というお茶を生産している吉野さんを通して、水俣の人たちがどんな願いを持っているのか考えよう」というめあてのもと、吉野さんが『みなまた』と名付けた理由を考えたり、水俣の人たちがどんな願いを持っているのかを考えたりして学習を深めていくのである。具体的には、しっかり自分の考えを作った後、地域の方や保護者そして子供たちの混合でグループを作り、グループディスカッションを通して学習を深めていくのである。下記は、授業後の子供たち、保護者・地域の方々の授業感想である。

(子ども)

・ふだん友達と勉強するときよりも、大人の人と話し合うとぜんぜん違うような意見とかが出て驚きました。地域のおじいちゃんもよく考えるなあと思いました。大人の人がいると公害の問題についていろいろな考え方があって、たくさん話し合うことができるので楽しかったです。

(保護者)

・初めての経験で、最初は先生の話聞き逃さないように必死に耳を傾けていました。子供たちと机を並べて授業を受けて子供たちの授業に対する態度や意気込みがそばに伝わってくるのでとても良かったです。今子供たちがどんなことを考え、勉強しているのかを知るためにもこのような取組は親にとってとてもよいことだと思います。

(地域の方)

久しぶりに緊張した。でも子どもの意欲的な発表をうれしく思った。水俣病だけを勉強してしまうとマイナスイメージだけが残るので今回のように一市民の現在のあり方を通した環境問題の勉強は将来子供たちが成長したときに深い意味を持つものだった。班で意見交換をしたが小学生でもよく考えてくるなあと感じた。こんな共学の勉強は、子どもにも大人にもとても楽しいものです。久しぶりに環境問題について考えたがよい刺激になった。こんな機会があったらまた参加してみたいです。

上記の授業感想からもわかるように、子供たちにとっては、学級という同質の学習集団の中に、深い考え方ができる集団が加わることによって、班での議論が深まり、学習がより活性化できるし、保護者や地域の人たちと考えを深めることができたことに満足感を感じている。また、地域の人から適切な支援を受けることができるので、授業の効率化も図ることができた。保護者や地域の人たちにとってもこれまでに学んだ環境問題についての再認識する機会にもなっているし、学校理解や

子ども理解を深めてもらうよい機会になっている。

以上のように、学校と地域・保護者と連携した取組(D, E, G)については、4つのカリキュラムを視点にして実践を通して深めていくことが大切である。なお、コミュニティ・スクールを展開するに際しては、新しい取組を考えることも必要であるが、まずは現在学校のカリキュラムや各種取組、PTA等の取組、地域公民館の取組をD, E, F, Gの重なる部分に着目して見直し、整理するところから始めることが大切であると考え

5 コミュニティ・スクールを推進して見えてきた成果

3年間コミュニティ・スクールを具体的に推進してきて見えてきた成果を経営・運営面、子どもの教育の面、家庭・地域の取組の面から整理すると次の資料6のとおりである。

まず、学校の経営・運営面からは、「地域・家庭の学校理解が一層進んできたこと」「地域への説明責任が校長としての経営ビジョンの見直しにもなっていること」「学校、家庭、地域の役割の自覚による学校に対する苦情の減少」である。

次に子どもの教育面では、子どもたちの基本的生活を含めた生活力がかなり向上し、併せて学力向上にもつながっている。平成19年10月に全国学力・学習状況調査が行われたが、本校の結果は、国語、算数ともに全国平均に比べて10ポイント以上上回っていた。また、資料7は、平成19年度全

資料6 (コミュニティ・スクールを実践して見えてきた成果)

(1) 経営・運営面

- ア 学校の意思・考えが家庭・地域に浸透しやすくなってきたこと。
- イ 校長自身が日常的に自校の経営を見直し機会になっていること。
- ウ 地域の教育資源の活用等授業づくりに工夫が見られるようになってきたこと。
- エ 地域と学校との連携行事が活性化してきたこと。
- オ 学校に対する理不尽な苦情が減ってきたこと。

(2) 子どもの教育面

- ア 子どもの学力が向上してきたこと。
- イ 子どもの生活力(基本的な生活習慣)が向上してきたこと。
- ウ 子どもたちが地域とふれあう機会が拡充していること。

(3) 家庭・地域の取組の面

- ア 地域・保護者の意識が協力・参加から参画へ変わりつつあること。
- イ 学校の風通しがよくなり、住民の目が学校にやさしくなっていること。
- ウ 学校に気軽に出向いていく機会が増え、学校と地域の垣根がとれてきたこと。
- エ 子育てに対する実践活動が盛んになってきたこと。

資料7 全国学力・学習状況調査の児童生活状況調査結果の一部（平成19年度）

質問事項の一部	全国比
○勉強する時間を自分で決めて実行していますか	112.4
○家で学校の宿題をしていますか	125.4
○家で自分の興味のあることについて調べたり、勉強したりしていますか	112.1
○家で学校の授業の予習をしていますか	171.4
○家で学校の授業の復習をしていますか	118
○新聞やテレビのニュースなどに関心がありますか	118.4
◎朝食を毎日食べていますか	105
◎学校に持っていくものを前日かその日の朝に確かめていますか	102.5
◎身の回りのことはできるだけ自分でしていますか	116
◎家の人と学校での出来事について話をしていますか	117
◎テレビを見る時間やゲームをする時間などのルールを家の人と決めていますか	109.3
◎家の手伝いをしていますか	118.4
□学校で楽しみにしている活動がありますか	110.7
□物事を最後までやり遂げてうれしかったことがありますか	103.5
□難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか	118.1
□自分にはよいところがあると思いますか	122.1
□将来の夢や目標を持っていますか	104.3
●地域の自然や歴史に関心がありますか	118.4
●地域の行事に参加していますか	125.4

※全国比：全国を100としたときの比率

国学力学習状況調査と併せて実施した子どもの生活実態調査結果の一部である。○が家庭での学習習慣に関わる事項、◎は家庭での基本的な生活習慣に関わる事項、●は学校外（地域）の活動に関わる事項、□は子どもの基本的価値観に関する事項である。このデータ結果から見えることは、家庭での学習・生活等の習慣の定着度や地域活動への関心度が全国平均と比べてきわめて高くなっているということである。どの項目についても家庭の努力のあとが伺える。これはコミュニティ・スクールを推進していく中で、学校とともに子どもを育てていこうとする当事者意識が各家庭に浸透してきている証拠である。また、学力向上は学校の本務であるが、学校だけでは難しい状況がたくさんある。学校と家庭との連携・協力によって、よりよく伸びていくのである。そのことも影響して、「学校で楽しみにしている活動がある。」「物事を最後までやり遂げて、うれしかったことがある。」「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦する。」「自分にはよいところがある。」「将来の夢や目標を持っている。」といった学校への満足度、自己効力感、自尊感情等もよりよく伸びていることがわかる。

家庭・地域の取組の面でのア、イ、ウ、エからうかがえることは、保護者、地域、学校の教育力を活かした多様な実践活動が自然発生的に生まれてきていること、地域の中で子どもの健全育成に

対する当事者意識の高まりが見られるようになってきていることである。地域や保護者による学習支援ボランティアとして登録して頂いている方々は約2000人を超えて実際に平成18年度の1年間で学校のG TやV Tで学習支援をして頂いた方はのべ1000人を超えた。毎日の学校の生活の中で保護者や地域の方々がいけない日はないくらいである。また、地域でも子どもを支援する活動が盛んになってきた。例えば、今まで地域で点在していた文庫活動ボランティアを活用して、公民館で総合的に展開する『地域読書相談室』の活動があげられる。これは、実働組織の一つである「心をはぐくむコミュニティ」が主催になり、楽しい読書活動を地域の中で盛んにしていこうとする取組である。幼児から子ども、大人までだれでも対象とし曜日を決めて開講している活動である。地域の教育資源を束ねた地域実践活動の一つである。資料8は、日の出小学校で共育環境が醸成されつつあるなど心から感じた事例である。Iさんの行為のすばらしさとともにご多忙な中に出来事を学校に伝えて頂いた地域の方のすばらしさ、まさに、地域ぐるみで子どもを育てようとする「共育」環境の一つの姿である。

資料 8

「先日の日曜日に、校区にあるスーパーで近所のおじいちゃんが買い物をしていたとき、おじいちゃんが押していた買い物カートが、商品の入っている段ボールの箱にあたり、中の品物が床一面に落ちてしまいました。そこに会った日の出小学校の4年生のIさんは、躊躇せずに、須玖におじいちゃんが落とした商品の片付けをしてくれたということです。そのやさしいIさんを見て何となく誇らしげに思えました。とてもうれしかったです。という話です。実は、Iさんはお母さんの手伝いで夕食の買い物を頼まれて一人でスーパーに買い物に来ていたときの出来事だったそうです。」

コミュニティ・スクールを初めて3年間、まだ、途についたばかりであるが、3年間の実践の歩みを見てくると、私自身、コミュニティ・スクールはそれだけの効果が期待できるシステムであるという確たる見通しを持つことができた。

最後に、3年間ともにコミュニティ・スクールを立ち上げ、進めてきた元日の出自治会長・学校運営協議会会長のK会長から3年目の終わりに次のような手紙を頂いた。(資料9)

資料 9 「学校づくりは、まちづくり」

(途中略) 最初、学校づくりや子どもの教育は学校の先生と保護者がすることで、何で地域のしかもすでに子育てが終わった人の多い地域の関係者が協力しなければならないのかと、戸惑っていた地域の人たちも、いろいろな行事やそのほかで関係を深める中で、次第に積極的に参加者が多く集まるようになりました。例えば、6年生の修学旅行に支援者として地域の人たちが同行し、一緒に活動をするなど、地域の人たちの楽しみの場にもなっているようです。まだ、コミュニティ・スクールとして3年目ですが、より密度の濃い、ふれ合いが多くなり、今では日の出小学校を「おらが学校」「ウチの学校」というように、大きく地域の人たちの意識が変わってきました。学校の風通しもよくなり、地域の人たちの子どもを見る目が従来に比べて優しくなり、また子どもたちも笑顔で挨拶をするようになりました。

特に、地域にとって、町の人たち同士が学校を通して、お互いに知り合い、笑顔で挨拶を交わすようになりました。このことは、地域の運営にとって、非常にプラスになります。これは、

自治会にとってコミュニティ・スクールについては、「学校づくりはまちづくり」でもありと考えています。このように、統一目標である「豊かな学力・心を持った子供の育成」の実現のために、今後とも、地域ではできる限りの協力体制で望むこととしております。(途中略)
(平成20年1月 元日の出自治会長)

このような地域における活動状況は地域の教育力の高まりが顕在化したものであるととらえることができる。コミュニティ・スクールは単に学校改善にとどまらず、共育のための連携の「まちづくり」へと着実につながってきているのである。

参考・引用文献

- ・福岡県春日市教育委員会・春日市立春日北中学校・春日北小学校・日の出小学校「地域運営学校（コミュニティ・スクール）の展開～地域が支える開かれた学校～」平成20年1月1日三光株式会社
- ・山本直俊編著「現場主義に立つ学校教育改革支援論」2006年10月 大道印刷
- ・「はるか・プラス（「新しい公共」としての学校を考える）」2011.7. ぎょうせい
- ・「はるか・プラス（コミュニティ・スクールにみるこれからの学校づくり）」2008.9.ぎょうせい
- ・学校運営の改善の在り方等に関する調査研究協力者会議の提言（文部科学省初等中等教育局参事官付「子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ～地域とともにある学校づくりの推進方策～」平成23年7月5日
- ・佐藤晴雄「学校を変える 地域が変わる」2002年11月12日 教育出版
- ・佐藤晴雄編集「学力向上をめざす管理職の実践課題第3巻（学校・家庭・地域がともに進める学力づくり）」平成17年10月1日教育開発研究所
- ・貝ノ瀬滋著「小・中一貫コミュニティ・スクールのつくりかた」2010年4月 ポプラ社